

東大後期、20年入試から理科3類は廃止し、 全科類一括募集(100人)！ 入学手続き時に希望の進学科類を登録

旺文社 教育情報センター

18年3月22日

東大は現在、文科1、2、3類、理科1、2、3類の6科類の募集枠に分け、それぞれ前期日程試験及び後期日程試験の分離分割方式によって新入生を受け入れているが、後期日程試験の科類別募集を大幅に見直す入試制度を22日、発表した。

20年入試から、後期日程試験を存続させる中で、後期枠を現行の約11%から約3%に縮減し、文理融合型の一括した選抜を行う。20年後期試験の概要は、次のとおりである。

< 募集方法・募集人員 >

募集方法

理科3類を除く、全科類を1本化して募集する。理科3類は前期日程のみの募集となる。

なお、入学手続きの際に、進学科類を登録する(理科3類<医学部>を除く全ての科類に進むことが可能である)。

募集人員；100人(18年募集人員；前期=2,729人、後期=324人の計、3,053人)

< 選抜方法 >

センター試験と2次試験、及び調査書による。

2段階選抜；志願者が募集人員を大幅に上回った場合、センター試験の成績により、募集人員に対する倍率「約5倍」で第1段階選抜を行い、その合格者に対し2次試験を行う。

東大の前・後期を併願した場合、前期合格者は入学手続きの完了如何にかかわらず、第1段階選抜で不合格者として扱われる。

合否判定は、原則として2次試験の結果に基づく。

< 入試科目 >

センター試験(5教科6科目)

国語(必須) / 地歴・公民(世界史A、世界史B、日本史A、日本史B、地理A、地理B、現代社会、倫理、政治・経済の9科目から1科目選択) / 数学(数学・A<必須>、数学・B、工業数理基礎(*)、簿記・会計(*)、情報関係基礎(*))の4科目から1科目選択) / 理科(物理、化学、生物、地学の4科目から1科目選択) / 外国語(英語、ドイツ語、フランス語、中国語、韓国語の5科目から1科目選択。英語のリスニングテスト成績の利用については未定) *印の科目は、選択に制限あり。

* 現行の後期センター試験；文科 1 類 = 4 教科 4 科目 / 文科 2 類 = 3 教科 4 科目 / 文科 3 類 = 4 教科 4 科目 / 理科各類 = 3 教科 4 科目

2 次試験

総合科目 (100 点)；英語の読解力と記述力をみる。

総合科目 (100 点)；事象の解析への数学の応用力をみる。

総合科目 (100 点)；文化、社会、科学等に関する問題について論述させ、理解力・思考力・表現力をみる。

< 東大でも、後期の “ 異才 ” 学生に疑問 >

東大でも、他の有力大学と同様、前・後期ぶち抜きの、いわゆる “ 敗者復活 ” 的色彩の強い後期日程試験を見直す議論が以前からあった。前期入試に対する評価は極めて高いが、後期入試に関しては “ 受験機会の複数化 ” に対する肯定的評価を除けば、積極的な評価は少ないとしていた。この前提に基づき、入試方法改善の選択肢として次の 3 点を挙げ検討したようだ。

後期入試を廃止し、全体を前期入試に移す。

後期入試に何らかの変更を加える。

新たに 「 第 3 の入試 」 を導入する。

については、 “ 受験機会の複数化 ” を受験生から奪うばかりでなく、国大協の方針に反することにもなり、当面は無理であるとしたようだ。

実際に検討すべきは と だが、現行の後期入試は “ 受験機会の複数化 ” という点では歓迎すべき点はあるものの、所期の目的である “ 学生の資質の多様化 ” がどこまで達成されたかは必ずしも定かではないとし、一部で入試成績と入学後の成績にマイナスの相関があること、一般に前期入試の入学者と比べ、大学での満足度が低いことなどが明らかで、後期入試の所期の目的からすればむしろ逆の結果が出ているなどと指摘されていた。そして、後期入試が必ずしも “ 異能・異才 ” 型学生の増加に結びついていないならば、むしろ入試に割くエネルギーを増やすだけに終わっていることになるなどという。

また、 の 「 第 3 の入試 」 としては、推薦入試や A O 入試などが考えられるが、選抜方法としては馴染まないという。

結局、国大協の分離分割方式堅持、前・後期募集枠の弾力化といった基本方針に則り、の後期入試改善に踏み切ったようだ。

なお、入試科目等の詳細は、7 月に発表される 「 平成 19 年度入学者選抜要項 」 に “ 予告 ” として掲載される。